

りし夢のまゝにしつらひをれば、是は何のためぞと、あやしみければ、さるべきゆへありとて、めでたくしつらひをきつ、其朝にほのゝと明はなる、ほどに、山のおくのかたより、大なる蜂一、二百二三百うちむれて、いくら共なく入集るさまいとけむづかしく見けり、日さし出るほどに、敵の許へ是に侍り、申べき事ありといへりければ、敵悦びて、尋失ひて安からずおぼえつるに、いみじき幸なりとて、三百騎ばかり打出たり、いきほひをくらぶるに、物の數にもあらねば、侮りていつしかかけくむほどに、蜂ども假屋より雲霞のごとくわき出、敵の人ごとに、二三十、四五十取つかぬはなし、目鼻ともなく、はたらく所ごとにさし損じけるほどに、物も覺えず、打ころせども、五六こそしぬれ、いかにもくする力なくて、弓箭の行衛もしらず、まづ貌をふさぎさはぎけるほどに、思ふさまに馳まはりて、敵三百餘騎、時の程にたやすくうち殺してければ、恐れなく本のあとに還居にけり、死たる蜂少々ありければ、笠置のうしろの山に埋て、堂をたてなどして、年ごとに蜂の忌日とて、恩を報じけり、

〔古事談〕王道后宮、京極大相國

○藤原宗輔

被飼蜂之事、世以稱無益事、而五月比、於鳥羽殿、蜂栖俄落テ、御

前多飛散ケレバ、人々モサ、レジトテ、ニゲサワギケルニ、相國御前ニ枇杷ノ有ケルヲ一總トリ

テ、コトヅメニテ、カハラムキテ、サシアゲラレタリケレバ、蜂アルカギリツキテ、チラザリケレバ、

乍付召共人、ヤハラ捨ケリ、院モ賢ク宗輔ガ候テト被仰テ、令感御ケリ、

〔十訓抄〕京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくら共なく飼給ひて、何丸か丸と名を付てよびたまひければ、召にしたがひて、格勤者などを勘當し給ひけるには、何丸某さしてことの給ければ、そのまゝにぞふるまひける。出仕の時は、車のうらうへの物見にはらめきけるを、とまれとのたまひければ、とまりけり、世には蜂飼の大臣とぞ申ける、

〔赤染衛門集〕ぎだりんにありしひじりの、たけの枝にはちのすくひたるをおこせて、釋迦佛の、